法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

コウルリッジとドイツ文学(4)クロプシュトック

Takayama, Nobuo / 高山, 信雄

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
65
(開始ページ / Start Page)
27
(終了ページ / End Page)
46
(発行年 / Year)
1988-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005227

Hosei University Repository

コウルリッジとドイツ文学（四）

――クロプシュトック――

高山信雄

一、はじめに

ゲーテの『ヴェルテル』を読んだことのある者ならば、当時のドイツの青年たちの間に、クロプシュトックの詩が如何に親しまれていたかがわかるであろう。突然襲ってきた激しい雷雨の後、舞踏会場のホールの片隅に寄り添ったヴェルテルとロッテが、興奮の冷めやらぬ面影で戸外を眺めているうち、ロッテが感動のまなざしで目に涙を溜めながら、ヴェルテルの手に自分の手をのせて、思わず、「クロプシュトック！」と叫んだ。ヴェルテルはすぐに理解したか、それはクロプシュトックの『春の祝祭』（*Frühlingsfeier*）の一節を思い出したからである。

国民詩人といわれるクロプシュトックは、その情熱的な多くの抒情詩で、ドイツの若者たちを魅了していた。彼の詩を思い起こすことで、二人の若者の心に共通の感情と感動が生じるほど、彼の詩が当時の青年男女の心に深く印象づけられていたのである。これは単にゲーテが小説で扱ったことに過ぎないという考えもあろうが、実のところ、クロプシュトックが描き出す感情の世界は、当時の知的青年男女の憧れの的であり、彼等はこぞってクロプシュトックの詩を愛読していたのである。彼が国民詩人といわれ、ドイツ国民から愛されたのは、そのことを示す一つの事実である。

クロプシュトックはまた、ドイツにおける「現代抒情詩の父」といわれている。彼は自己の個人的な感情を普遍

Hosei University Repository

的に昇華して、高まった情緒がみなぎっている詩行を書いた。その感情が、詩行を通して若い読者に大きな感動として伝わってくるのである。当時の読者は、それまでの古いロココ形式の戯曲などには飽きあきしていたので、クロプシュトックを彼等の感情の解放者のように考えていた。このことは、当時まだ後進性の強かったドイツにおいて、多くの知識層が抑制された精神のはけ口を求めていたことに、大いに原因がある。彼等はこぞって、クロプシュトックの抒情的で情熱的な世界に没入することになったのである。彼の詩行にみられる内的な感情の高まりは、やがてゲーテやシラーが中心となるあのシュトルム・ウント・ドラングの時代になって、さらに激しいものとなる。この感情の高まりは、古典主義に至って鎮静化するけれど、しかしながらこうした文学的感情の変化は、文化的に若いドイツの通るべき道であった。

このような感動を全ドイツにもたらしたクロプシュトックであるから、詩に深い関心をもっていたコウルリッジが彼に興味を示さないわけはない。ドイツ滞在中に、まず会った文学者は、このクロプシュトックであった。

コウルリッジは、クロプシュトックとの会見から得たものは何もないようなことを言っているが、果してそうであろうか。反対に、クロプシュトックと会ってその意見や見解を知り得たからこそ、コウルリッジの独自性がはっきりしたとも思われる。そう考えると、彼がクロプシュトックに会ったのは、貴重な体験であったといえよう。そこで本稿では、コウルリッジがクロプシュトックをどう思い、どう評価したかを調べ、クロプシュトックがコウルリッジにどんな影響をもたらしたかを考えてみることにする。

二、訪　問

ドイツに渡ったコウルリッジとワーズワースの一行は、まずハンブルグに宿を取った。ハンブルグに着いたのは、一七九八年九月一九日の午後四時ごろだった。それから二日後の九月二一日の午後四時ごろ、コウルリッジはワーズワースと一緒にクロプシュトックを尋ねたのである。これには、ハンブルグの城門から歩いて一〇分ほどの所に住んでいたクロプシュトックの弟が、その案内役を買ってくれた。

クロプシュトックの家はハンブルグの街の城門から四分の一マイルのところにあった。コウルリッジは、ドイツ

Hosei University Repository

ではあまりにも有名なこの詩人に、会う前から一種の畏敬の念をもっていたし、また、さぞかし素晴しい詩人であろうと期待もしていた。クロプシュトックの家が、道路に面した平凡な家屋であり、周囲の情景も、わずかな木立と草原といった、何の美的感興も湧かないような眺めだったので、クロプシュトックの素晴しく抒情的な詩を考えて、改めてこの詩人の芸術的想像力に感心したのであった。

コウルリッジ等の一行は、応接間に通されて少し待った。その待っている時間に、彼は応接室の中を観察した。そこには詩の女神（ミューズ）の二つの彫刻と、クロプシュトックの『頌詩（オーデ）』から題材をとったと思われる幾枚かの版画があった。[1] その部屋にはまた、レッシングの肖像画があった。[2] そのレッシングの肖像は、かつらをかぶった姿で描かれていたが、これはコウルリッジの趣味ではなかった。

やがてクロプシュトックが入ってきた。その時の様子は、レッシングの肖像にあったようなかつらをかぶり、背はどちらかというと小柄の方で、その表情に迫力がなく、コウルリッジは失望してしまった。彼は堂々として活気に満ちたクロプシュトックを想像していたのである。しかしその期待とは裏腹に、彼の前に現われたのは年老いた貧弱な感じのする老人だった。

コウルリッジが述べるところでは、クロプシュトックの表情から、理解力・知性・重厚さなどはまったく感じられなかった。大きな半長靴にむくんだ足がすっぽりと入っているのが、すこぶる印象的だったようである。このように、クロプシュトックの容貌からは、コウルリッジが想像していたような詩人像は得られなかったけれど、彼の心からなるもてなしにはたいへん感謝をしたし、年老いてもなお生き生きと語る態度には、すっかり感動した。[3]

クロプシュトックの方から口を開いて、会話が始まった。コウルリッジもワーズワースもドイツに来たばかりで、ドイツ語に慣れておらず、したがってドイツ語で話をすることは無理なことだった。クロプシュトックはフランス語を自由に操れたし、ワーズワースもフランスに行ってアンネット・ヴァロンと恋を語ったくらいだから、フランス語が達者だった。そこでこの二人は、フランス語で語り合った。コウルリッジは、クロプシュトックが英語で話をするのに大分苦労している様子なので、ラテン語で話をし出した。

クロプシュトックは、大のフランス嫌いになっていた。フランス革命が始まったころ、彼はフランスを讃えて頌

Hosei University Repository

歌を作ったことがあった。そこで彼はフランスの革命後の共和国の議会から賞を贈られ、フランス政府に招待された。しかし新しいフランス共和国が暴力と恐怖の政治を行なうようになると、これに落胆し、もらっていた賞を送り返えした。そのとき、前のフランス讃美を取り消す詩歌を付すことを忘れなかった。[4] ヨーロッパの当時の進歩的な知的青年たちが味わった理想と現実の乖離とそれに伴う幻滅の感情を、クロプシュトックも味わっていたのである。コウルリッジとの話の中でも、ウンベール将軍麾下のフランス軍が降伏したことを喜んでいたし、イギリスのネルソン提督の率いる海軍の勝利を確信していると語り、その勝敗を強い調子で予言し断定していた。彼の表情にも言葉の上にも、彼が大の反フランス主義者であることがにじみ出ていた。[5]

コウルリッジが意外に思ったことは、クロプシュトックがドイツの詩の歴史やドイツのこれまでの詩人たちのことを、あまり知らないことであった。クロプシュトックは、二・三人の詩人の作品には多少触れていたらしいが、体系的な文学史的見地から詩の流れを見ようとはしていなかった。彼は詩を愛し、自己の内に詩の可能性を追求したけれど、アカデミックな立場で詩を体系的且つ客観的に見ようとはしなかったのである。クロプシュトックにはこういう議論は得意ではなかったようで、彼の友人でコウルリッジたちも会ったことのあるエベリング教授ならこうした問題については博学だと言い、それ以上この話を続けようとはしなかった。[6]

同行したワーズワースも、この日のクロプシュトックを回想して、一八〇五年一月五日付のボーモント夫人宛の手紙で、クロプシュトックはそのとき足がたへんはれていて、歩くのに非常な苦痛と困難を感じていたと述べている。また、この手紙でクロプシュトックが再婚した夫人のことに触れ、この夫人はクロプシュトックと一緒にいたが、若くて美しい女性だったと言い、こんな老人に嫁いできたのは彼の看護をするためだろうと思うと述べている。そして、彼女はきっと立派な女性だと思うが、彼の先妻ほど感受性の豊かな人ではなさそうだとも言っている。クロプシュトックの先妻は、アルトナという所に葬られているが、その墓の上にはイチイの木が植えられていて、その木が茂っているのを、その年の夏にワーズワースのところを訪れた芸術家のデュッパ氏が彼に語ったという。[7]

コウルリッジは話をしているうちに、クロプシュトックがドイツの現実を正しく認識していないことに気づいた。文学の分野でも哲学の分野でも、彼が誤った判断をしているようにコウルリッジには思われた。それというのも、

Hosei University Repository

コウルリッジたちが会ったときのクロプシュトックはすでに老齢の境にあり、コウルリッジやワーズワースの若くて瀑測とした頭脳による情報の集収と分析の能力とは、比較できない状態にあったからであろう。当時の彼等の推察ではクロプシュトックはすでに病気に悩んでいたらしい。歩くのにも困難な状態であったとすれば、なおさらのことである。事実、クロプシュトックは、その後、四年ぐらいしか生存していなかった。

コウルリッジの失望は、クロプシュトックが年をとりすぎていることに起因している。ドイツ詩の分野で偉大な足跡を残したクロプシュトックであるから、コウルリッジは会う以前から相当な期待をしていたらしいが、本人と会ってみると、抱いていたイメージが違っていたのであろう。彼はその第一印象として、彼が見ていた胸像とは全然違っていた、[8] と述べているが、これはまさに彼の期待を裏付けるものであると思われる。

コウルリッジが会ったときのクロプシュトックは、すでに七四歳で、もうほとんど詩作活動を行なっていなかった。このとき、コウルリッジはまだ二五歳であった。この青年コウルリッジが、もう上あごの歯がすっかり抜けている老人と話をしたのであるから、その会話にある程度の認識のずれがあっても仕方のないことであろう。

こうして、すでに自己の詩という芸術を完成させて、引退の花道にあるクロプシュトックと、詩人としていまや最盛期のエネルギーをもつコウルリッジが出会ったのであった。しかしながら、コウルリッジの過少な評価にも拘らず、実のところこのことは、コウルリッジにとって、ドイツ紀行の最大の土産の一つであると言っても過言ではあるまい。

三、クロプシュトックとドイツ

クロプシュトックは、ドイツ文学の大きな転換期に活躍した。ちょうどその時代は啓蒙主義の波がドイツに押し寄せてきたときだった。啓蒙主義は、クロプシュトックよりも五歳年下のレッシングにおいて完成された。啓蒙主義の文学は、一般に明白な形式とはっきりした表現を重視し、自然を模倣することが主要な課題であって、文学の主たる目的は娯楽性と人々の知性を啓蒙することにあった。ドイツ啓蒙主義は、ゴットシェトがまず先鞭をつけた。彼はヴォルフの哲学を自己の文学に応用し、当時、地方によって混乱していたドイツ語を、演劇を通して統一し、

Hosei University Repository

それを格調の高い言葉にすることに貢献した。その意味では、ゲーテやシラーの文学によるドイツ語の統一効果に道を開いたものといえよう。ゴットシェットは啓蒙主義の立場を強く貫くために、文学の本質は理性であると考え、感情に対する理性の優位性を説いた。このゴットシェットの文学理論に反対して、感情を中心に据えた文学理論が起こってきた。想像力を働らかせて創作を行なうことを重要視し、中世を回顧し、一七世紀イギリス文学、つまりミルトンやシェイクスピアの文学に学ぼうとする立場をとる、いわゆるスイス派といわれるボードマーもその一人である。また、教訓的ではあるが情感的な文学作品を書いたゲラートもその一人である。クロプシュトックも、理性よりは主観的な情緒を大切に考え、宗教的教訓や心情を含む作品を作り出した。前述したように、彼のこうした情緒に訴える詩作は、この後にくるシュトルム・ウント・ドラングの時代において、さらに展開され、充実したものとなる。

クロプシュトックは、一七二四年七月二日にクヴェートリンブルクの非常に信仰深い家庭に生まれ、両親から敬虔な宗教教育を受けて育った。彼はシュールプフォルタのギムナジウムを卒業した後、一七四五年から三年間、イェーナ大学とライプチヒ大学で神学を学んだ。大学を出てから二年間ほど、ランゲンザルツァで家庭教師をしていたが、一七五〇年、ボードマーのいるスイスへ行き、親しくボードマーと語り合う機会を得た。ボードマーはすでに一七三二年にミルトンの『失楽園』の翻訳を完成していた。後にクロプシュトックがミルトンの『失楽園』を念頭において、『救世主（メシアス）』を書いたのも、こうした経緯があってのことだった。

クロプシュトックはまた、ライプチヒで学んでいたころ、ゲラードが中心となっていた雑誌『ブレーメン寄与』にも関わっていた。したがって彼は、感性を重視する思想家且つ詩人である人たちと親交をもったのである。このことが、後にクロプシュトックがあの独自の内的感情を豊かにみなぎらせる抒情的な詩風を確立したことの、大きなモチーフとなっていると考えて差支えない。

一七五一年、クロプシュトックはデンマーク王フリードリヒ五世に招かれて、コペンハーゲンに行った。それからおよそ二〇年間、彼はデンマーク王の手厚い被護のもとに、この地に住みついて、あの大作『救世主』の草稿を書いた。しかし王の死後、彼の面倒をみてくれていたベルンストルフ伯爵が失脚したため、彼は国外に移ることに

Hosei University Repository

なった。すなわち、一七七〇年から、彼はデンマーク公使として、ハンブルグに住むようになったのである。したがって、クロプシュトックはコウルリッジの生れる前からハンブルグにいたことになる。それゆえ、コウルリッジたちが訪れた年には、もう三〇年近くも此処に住んでいたわけである。

ドイツの一八世紀の後半期に、啓蒙主義に支えられてドイツ自身の文学が誕生した。これは従来までのような外国の支配から、ドイツ国民が独自の文学を作り出していったという意味で、非常に重要なことである。クロプシュトックや、「北方の魔術師」といわれたハーマンがその担い手となった。ハーマンの文体は難解で且つ諷刺の効いたものであるため、彼は人々にそう呼ばれたのであった。それにヘルダーも国民文学の重要な担い手であった。クロプシュトックは、こうした人々の先頭に立っていたのである。

クロプシュトックは、デンマーク国王から年金を受けるなど、生活の経済的な面が安定していたこともあって、自分の好きな詩を書いていけた。つまりドイツにおける初めてのプロの詩人がここに誕生した。それまで、詩人は詩を書くだけでは生活できなかったのである。そうした憂いのないクロプシュトックは、自己の感性の趣くままに、格調の高い詩を作った。そして人々に詩人の存在を知らしめ、詩人という職業を不動のもとして認めさせたという点で、クロプシュトックの業績を高く評価しなければならない。

クロプシュトックの大作『救世主』は、彼がすでにギムナジウムに在学中から雄大な宗教詩を書きたいと考えていたことが、やっと実現したものである。彼の育てられた宗教的な環境の影響で、彼はもう一五歳ごろからウェルギリウスに憧れをもっていて、このローマ詩人に倣って、自らもドイツのウェルギリウスたらんとしたのであった。彼が『失楽園』を読み出したのも、このころであったという。彼は一七四八年に、『ブレーメン寄稿』に『救世主』の最初の三章を発表したところ、それが非常に反響を呼んだ。クロプシュトックはこの詩の続編を、コペンハーゲンにおいても、ハンブルグにおいても書き、完成したのは一七七三年であるから、この詩の完成にほぼ二五年の歳月を要したことになる。

この『救世主』は、二〇の歌から成っている叙事詩であるが、それは単なる叙事詩ではなく、すこぶる個人的主観性の強い叙事詩である。一七四八年に発表した最初の三章だけでも、当時の評判はたいへんよく、彼はこの三章

Hosei University Repository

のみで、ドイツ屈指の詩人に数えられたのである。この詩が扱っている題材は、キリストの受難と復活の物語であって、『神曲』や『失楽園』のように、超自然的な世界を想定して天国と地獄を考え、そこがこの詩の舞台となっている。

クロプシュトックの感情が、恣意的な暴走をせずに詩行に充満しているのは、彼が幼い頃から受けた敬虔な宗教的情調のためであると考えられている。彼が単なる感情家ではなく、深く秩序立った倫理観をもつ敬虔なキリスト教徒であったことが、この詩を浅薄なものとはせずに深みのあるものにしている原動力となっている。

感性の重視といっても、啓蒙主義者の間には若干の相違がある。ボードマーは文学の理念として、世の秩序を乱すような悪徳行為をなくすことと考え、教訓的なもの、たとえば寓話が文学の最高のものであると考えていたくらいであるから、文学の使命は啓蒙的行為の手段、つまり啓蒙主義の道具としか考えていなかったようである。しかしながら、彼とその一派が残した大きな功績は、ドイツ文学者の目をイギリス文学に向けさせたことである。既述のように、彼はミルトンに注目したが、同様に、彼等と同世代でイギリスで活躍中であったトムソンにも強い関心をもった。さらに後代の文学者に大きな影響をもたらしたのは、彼等がドイツではじめてシェイクスピアに注目したことであった。それに誘発されて、ゲーテやシラーもこれに関心をもち、A・W・シュレーゲルに至っていわゆるドイツ人の言う「われわれのシェイクスピア」が生じることになる。

ゲラートは、同じイギリス文学でも、リチャードソンの『感傷旅行』や、エドワード・ヤングの『夜の想い』などを模範として作品を書いた。どちらかという感傷的な立場に終始した。しかもボードマーと同様に、道徳的教訓を文学の中心に据えた。

ボードマーやゲラートの文学は、理性中心主義のゴットシェトの啓蒙主義文学に対する感情中心主義の反論である。ゴットシェトとボードマーは論争を一〇年も続けたが、結局スイス派といわれるボードマー側が優位を保つことになった。

こうしたドイツ国内の啓蒙主義文学思想の混迷は、クロプシュトックの出現によってはっきりした方向に定着した。つまり、彼の『救世主』にみられる敬虔な宗教的感情が、文学の中心として世に現われたのである。

Hosei University Repository

クロプシュトックの『救世主』は、宗教文学とはいっても、もうそこには中世色は影をひそめ、むしろ現実肯定的なものがある。彼のもう一つの大作、『頌歌』は、自然・祖国・愛・友情などを主題とするものであるが、ここにも独自の文学的展開があった。つまり、そこには純粋な感情が中心となっていて、古代でも中世でもない、彼の現存する時代の感情がみなぎっており、それが感動を与えるのである。文学も芸術の一部であり、芸術一般が、それが置かれている時代精神を反映するものが優れたものであると認める立場からすれば、このことは当然のことであるといえる。

四、クロプシュトックの見解

コウルリッジはハンブルグに滞在中に、クロプシュトックと三度ほど会う機会を得た。そこで、彼がクロプシュトックとした話の中で、話題がカントに及んだとき、クロプシュトックは、カントに対して冷淡な目をもっていることがわかった。つまり、コウルリッジがクロプシュトックに、カントについてどう思うかと訊いたところ、彼は、カントの評判はいまドイツにおいては落ち目であると言った。そして、ドイツで最大の形而上学者は、ヴォルフであるとも言った。さらに彼は、イギリスでもまだカントがあまり理解されていないのを聞いて喜んだ。(9)

コウルリッジは、何故クロプシュトックがカントを低く評価するのか、また、何故カントの名声がイギリスに広まるのを喜ばないのかを考えた。彼が考えるに、クロプシュトックにとっては、カントの哲学が理解し得ないものであったので、その良さがわからなかったのである。クロプシュトックはしばしばカント派の人々に悩まされていたようであったが、実際に彼等と議論することはほとんどなかった。彼がカント派の人々にすることは、いつもカントの本を持ち出しては、ある箇所を指し示し、そこの説明を求めることであった。ところが、こうしたカント派の学者たちは、それを説明する代わりに自分たちの意見を述べたがるので、彼はそんな意見を聞きたいのではなく、文章を説明して欲しいのだと言って、その場の議論をただちに中止することが多かった。(10)

さらにクロプシュトックは言葉を続けて、一五年ほど前には、ドイツには哲学の学派は幸いにもなかったので、誰一人として特定の教義に支配されずに自分の研究を続けられたという。ヴォルフには信奉者はいたけれど学派を

Hosei University Repository

形成していない。それに対してカントは、学派の創始者になろうとする野心があり、確かに成功はしているものの、ドイツ人はいまや再び正しい感覚を取り戻してきており、C・F・ニコライやJ・J・エンゲルなどが、さまざまな方法でドイツ国民の迷いを覚ましている、とクロプシュトックは語った。[11] ニコライはレッシングの友人で、文学における合理主義の指導者であった。彼はカントの批判哲学を盛んに攻撃し、自作の小説『ゼンプロニウス・グンディベルトの生活と意見』の中でも、この見解を披歴している。エンゲルはドイツ啓蒙主義哲学者の活動家で、その当時、著名であった。彼の魅力的な文体は、その哲学的内容よりも優っていたので、人気を得ていたのである。彼は大のカント嫌いで、口を開けばカントの教義を攻撃していた。クロプシュトックによれば彼等二人はとりわけカントという哲学者の不可解さやその哲学の不可解さから、ドイツ国民を解放することに貢献したという。そして、イギリス人が、人間としての常識を無視するような哲学者に騙されるほど無智ではないことを喜んでいるというのであった。[12]

コウルリッジはこれに対して、クロプシュトックのカントに対する見解は誤りであると考えた。クロプシュトックはカントがもはやドイツ国内ではあまり高く評価されていないというが、実のところドイツの大学には、カント学派やカントの弟子と考えられるフィヒテの哲学の教義を信俸する学者でない教授はもはやいないほどの現状であると考えた。また、カントの学説の一部または全部に反対する教授がいたとしても、カントの使った哲学用語を使わずに議論できる人はまずいない、とコウルリッジは考えた。

実際に、コウルリッジの判断は適切だった。クロプシュトックは、ドイツ哲学の現状をまったく理解していないようであった。それというのも、彼が単なる詩人であって、哲学者ではなかったからである。このころのドイツは、まさに絢爛たる精神文化が花開こうというときであり、カントはその先頭にあった。すでに音楽の分野ではバッハやヘンデルの活躍があり、楽聖といわれるベートーヴェンが古典派音楽を大成していた。また、文学の面では、すでにゲーテとシラーは友情を温めており、両者はドイツの巨峰となろうとしていたのである。哲学の面でも、カントの教義を敷衍し、これを自己の方向に発展させようとしていたシェリングやフィヒテがいたし、両極端の融合一致を説く極の理論を、弁証法へと高めたヘーゲルも、コウルリッジの渡独のときにはすでに頭角を現わし、シェリ

Hosei University Repository

ングやヘルダーリンとの交友を楽しむ哲学青年だった。ドイツはまさに新しい時代にあったのである。こういう中でカントの観念論哲学は、人々の大きな支持を受けていた。それは、一八世紀が啓蒙の時代、科学の時代といわれ、人々の関心は外界に向いていて、合理主義な立場や、イギリスにおけるように経験主義的な立場が尊重されていたので、それに対する反動として、精神界をより深く洞察しようとするのがカント哲学の立場であったからである。

これまでの哲学も文学も、いわば悟性中心の考えが軸となっており、その根底にアリストテレスの思想があった。アリストテレスの悟性偏重の思想は、そのまま分析主義や数理主義に関与し、やがて近代科学の思想の源となった。それに対し、カントはプラント思想の延長線上にある。彼のいわゆる物自体は認識する主体の主観のうちに生じる現象としての物ではなく経験の彼方にあって認識主体とは独立したそれ自体として考えられる物であって、現象の究極原因とされている。それは考えることはできても感覚による認識はできないものであった。従来のアリストテレス的思想で現象を感覚的に捉えようとしていた人々には確かに理解し難い説であったかも知れない。したがってカントの考えを、ヴォルフ流の啓蒙哲学を奉じるクロプシュトックが理解し得なかったのは、むしろ当然かもし知れない。

クロプシュトックがヴォルフをドイツ最大の而形上学哲学者と考えたことには理由がある。それはつまり、前にも述べたが、当時の啓蒙主義の文学者たちが、その理論的背景としてヴォルフ哲学を奉じていたからである。彼はライプニッツに師事し、その紹介でハレ大学で教鞭を取ると、それまで大学の学術言語であったラテン語でなく、日常の言語であるドイツ語で物理学や哲学の講義をしたことで人気を博したが、その思想は、基本的にはアリストテレスの思想を踏襲して、師のライプニッツの体系をスコラ哲学的に体系化したものだともいわれている。こうしたクロプシュトックの評価にも拘らず、ヴォルフは今日、ドイツの哲学者としてはそれほど世に知られていない。それに反して、カントはドイツ観念論哲学の創始者として広く世に知られており、カントとカントの哲学に関して、数多くの研究がいまなお盛んに続けられている。この事実からも、コウルリッジとクロプシュトックの両者の、いずれの判断が正しかったかが容易にわかる。

コウルリッジがドイツへ渡ろうと思い立った直接の原因は、シラーと会い、シラーを生んだ国の文学に親しむこ

Hosei University Repository

とであった。したがって、渡独した当時も、シラーについては相当な関心をもっていたことと思われる。ところが、クロプシュトックは、シラーを良く言わない。コウルリッジが数年前に感激して読んだ『群盗』は、彼には突飛もない作品であるように思われたらしく、読む気になれなかったようであり、コウルリッジが質問しても、その内容の詳細を知らないようであった。

クロプシュトックが言うには、シラーの人気はそれほど長続きしないだろうということであった。この当時シラーは、一連の美学論文を書いた後で、三十年戦争を研究した成果として、大作『ヴァレンシュタイン』を執筆中であった。シラーの人気はいまやドイツ国内のみにとどまらず、イギリスにも及んでいたのであるが、クロプシュトックはその事実すら理解しようとしなかった。彼は『ドン・カルロス』がシラーの最高の戯曲であると考えたが、その劇の筋は不可解に思えたといっていた。

現在でもドイツ人が国宝のように思っている二人の文学者、つまりゲーテとシラーには、限りない賞讃と関心が寄せられているが、当時の同時代に生きる者には、その世代の作家を評価することは難かしい。一般に五〇年つまり半世紀ほど経たないと、作家の評価は定着しないものである。したがって、当時のドイツ人がシラーを正当に判断できなくても仕方がないと言えるけれど、異国人で同時代人のコウルリッジが今日のシラーの評価を正しく予言したことは、彼がそれだけ鋭い批評の眼をもっていたことを裏付けるものである。また、このことは、カントについても言えるであろう。

クロプシュトックは、シラーよりもビュルガーを高く評価していた。つまり、彼によればビュルガーは真の詩人であり、長続きするであろうが、シラーはすぐに忘れ去られるだろうとも言った。そして、シラーはシェイクスピアを真似することに没頭しているという。そして、シェイクスピアにみられる唐突さは、シラーに一万倍以上もある、と言った。(13)

クロプシュトックは、ゲーテについてはすこぶる好意的であり、『若きヴェルテルの悩み』は彼の作品のうちで最高の傑作であると考えた。コウルリッジはゲーテに対して彼が好感をもっていることには不満を示していないが、シラー評にはすこぶる不満足だった。シラーはドイツを代表する戯曲家であり、美学者であった。このことはコウ

Hosei University Repository

ルリッジのそれまでおよびその後の作品に、シラーの影響が大きく現われていることを考えれば、自ずから明らかである。コウルリッジはゲーテを偉大な文学者だと認めてはいても、心情的にはシラーに同情していた。それはこの両者が同じように感性に優れた詩人だったからであり、共に知性派の詩人、つまりゲーテとワーズワースを、それぞれもっとも親交のある友人として身辺にもっていたからである。しかし、そうした心情的な感傷を抜きにしても、コウルリッジはシラーを正しく認めたのである。

クロプシュトックとコウルリッジのこの批評眼の差は、やはりコウルリッジの鋭い洞察力から生じたものと考えざるを得ない。ビュルガーは確かにこの当時、もてはやされた詩人であるが、現在ではほとんどその名を知る人は少ない。長い年月の間にその名声が風化してしまったのである。それはやはり、ビュルガーには、時代と風土の違いを超越して人々に訴えるものが少なかったからであると思わざるを得ない。

ビュルガーと同じような作家に、コッツェブーがいる。クロプシュトックはコッツェブーを不道徳な作家であるとして、また、力不足の作家であるとして軽蔑していた。その当時、コッツェブーはウィーンでなかなか人気があった。だが、クロプシュトックは、ウィーンの人々がドイツでもっとも賢い人でも機智に富んだ人々でもないと言った。[14] コッツェブーに対するコウルリッジの評価は、基本的にはクロプシュトックと同じように低いものであるが、彼はクロプシュトックのように感情的に軽蔑しなかった。クロプシュトックがコッツェブーを軽蔑するのは理由があった。コッツェブーは一七六一年にヴァイマールに生れたドイツ人であったが、二〇歳ぐらいでロシアに赴き、そこで就職して官吏となり、一七九八年にウィーンに来て宮庭劇場の座付作家となって、そこに二年ほど滞在した。したがって、コウルリッジとクロプシュトックが彼を話題にしていたときは、彼はウィーンの劇場において活躍していたのである。彼はその後一八〇一年に一度ロシアに戻ったが、今度はロシアの外交官として来独し、ドイツ国内の政治・文化・経済などの情報をロシアに提供する任務に当っていた。こうした彼の行為と自由主義に対する彼のかたくなな態度から誤解を生み、一八一九年に彼は専制ロシア帝国のスパイとみなされ、イェーナ大学の一学生に刺殺されてしまった。コッツェブーのこのような生き方は、祖国愛をテーマとして頌歌を書いているクロプシュトックに受け入れられるはずがなかったのである。

Hosei University Repository

コッツェブーは演劇の構成に優れ、機智にもたけていたが、その作品は内容的には軽薄さは免れなかった。コウルリッジはコッツェブーについて、興味本位の低俗なものを作る者だと思っていたらしく、コッツェブーとその模倣者たちが作るパントマイム的悲劇やお涙頂戴式の喜劇に大勢の人が押しかけるけれど、そういう人々に、これが一体喜劇ですか？　と尋ねてみたいと述べている。[15]

コッツェブーは、時流に生きた流行作家であったと考えてよいだろう。彼は二〇〇以上の作品を残しているが、今日、ドイツ文学史上に、名が出ることすら稀である。喜劇には若干見るべきものがあるとは言われていても、大部分の作品は、その場限りの浅薄なもので、芸術的価値は低いと考えられている。コウルリッジは、コッツェブーのことはすでに渡独前から知っていたようで、一七九八年一月二三日付のワーズワース宛の手紙の中で、ケンブリッジの一学生が、コッツェブーの『ベニオウスキー』という悲劇を翻訳して印刷中であるという話を聞いて、コッツェブーにはたいした才能はないと言うと、その学生は彼の長所を熱心に述べたと語っている。[16]

クロプシュトックのコッツェブー批判は、前述のように論理的でなく感情的である。それに対してコウルリッジは、コッツェブーの作品も読んでおり、内容的な面からこの作者を批評しているのである。

クロプシュトックはまた、ドイツ語という言語がもつ、意味を凝縮する力についても語った。彼が言うには、ホメロスのギリシア語の詩やウェルギリウスのラテン語の詩を、部分的に翻訳したところ、ギリシア語とラテン語の一行一行が、ドイツ語の一行一行になることがわかったが、英語ではこうはいかないであろうと言った。これに対し、コウルリッジは、ギリシア語の英雄詩の一行を、一般に一行半の英語の英雄詩に書き換えられるが、この一行半の詩形はドイツ語またはギリシア語の六韻脚より音節の数が多くなることはないと思う、と語った。コウルリッジが後に『文学評伝』の「牧神の書簡(二)」に付した説明によれば、クロプシュトックの観察は部分的に正しく、部分的に間違っているという。彼は、クロプシュトックの言葉通りの意味では、ギリシア語またはドイツ語と、英語との間では同一の内容を表現するのに必要なスペースを比較するだけならば、誤りであると考える。ドイツ語の六韻脚を英語の六韻脚に翻訳すると、三行の英訳詩で四行のドイツ語の詩を表現することができる。その理由は、英語には一音節と二音節の語が多く、ドイツ語もギリシア語も多音節語が多いからであるという。[17] ドイツ語もギリ

Hosei University Repository

シア語も接頭詞が多く、また合成語の様式も共通であるから、両者間の翻訳には問題は少なく、同一詩行に収めることができるという理論的背景がある、とコウルリッジは考えた。

クロプシュトックはまた、ヴィーラントはドイツ語を巧みに使うという点で、ドイツ第一の作家であり、ゲーテもこれには及ばないと言った。コウルリッジが、『オベロン』が最近英訳されたというと、彼はコウルリッジにその詩が気に入ったかどうか尋ねた。コウルリッジは、その詩の物語は途中に感興が湧かないようなところがあるし、また、天才が長編詩の興味を動物的満足感に向けてしまうのは無益なことであると言った。クロプシュトックは、ヴィーランドこそドイツ語を駆使する天才だと考えていたので、英訳された彼の詩には言語上の疑問をもっていたらしい。そして彼は、ヴィーランドの文体にすっかり忽れこんでいたので、この詩人の作品には最大の賞讃を示していた。実際に『オベロン』は、ゲーテもほめ讃えていたのであるから、ドイツ国内での評判はよかったことであろう。しかしながら、現在からみると、この時代に文才を示した作家にはハーマンがいるし、やや遅れて、ヘルダー、ゲーテ、シラーなどが輩出するので、ドイツ文学史上、ヴィーラントを最上位に置くわけにはいかない。コウルリッジは、英訳を読んだ限りでは、ヴィーラントの文体で特別感動したところはないと述べている。[18]

クロプシュトックは、その当時のドイツ文学者について非常に多くのことを語ったけれど、コウルリッジには一部に共感はもてても、どうも的はずれのことが多いように思われたことであろう。こうした認識のずれは、現代人からははっきりと優劣がつけられるけれど、当時の同時代人にとっては、正確な判断はたいへん難しいものであった。

五、クロプシュトックの作品

クロプシュトックの作品のうちで、もっともよく知られているものは、二五年もかけた大作『救世主』と、一七七一年にまとめられた詩集『頌歌』の二つであろう。

このうち『救世主』は、発表された当初から、大きな感動をもって迎えられた。中世からの伝統を受けて形式主義的な作品が主流を占めていた時代に、内に秘めた宗教的感情を六韻脚という比較的長い形態をとって表出したこ

Hosei University Repository

の詩には、読む人の感性に深く食い込む情緒があった。クロプシュトックの人間としての魅力もそこにあった。青年時代の彼はしばらくチューリヒに滞在したことがあったが、ここでの快活で奔放な詩人生活も彼の一面を物語っている。彼は多くの人と交際し、人々と共にいつも一緒に談笑したり、酒を飲んだり、踊りをおどったり、ときには水泳や乗馬などのスポーツを楽しんだという。当時としては極めて自由なこうした生活経験があるので、そうしたことも、彼の詩に反映して、啓蒙期の作家としては珍らしいほど、自由な感性に恵まれていたようである。

そうした彼の感性から湧き起こる声を、彼は祖国や友情や愛などについて歌いあげた。そうしたものが一冊にまとめられたのが『頌歌』である。

コウルリッジは、クロプシュトックに会う以前から、彼の作品については知っていたようであるが、実際に『頌歌』をドイツ語で読んだのは、彼との会見の後であるように思われる。[19] というのは、彼はクロプシュトックに会った後で、『頌歌』をドイツの本屋で買っているからである。

クロプシュトックは、自分の『救世主』の英訳が出てイギリスで読まれているのはよいけれど、その訳文はひどいものであり、満足できなかったようである。英訳のほか、他の国語の訳もひどいものであったが、英訳はとくにひどく、まったく翻訳になっていないと言って嘆いていた。彼が言うには、どのページにも原文の意味の半分も翻訳では表現されていないということであった。コウルリッジがドイツの抒情詩を翻訳する意志があるのを聞くと、彼はコウルリッジに、『救世主』の詩行の幾つかを選んで英語にして、イギリスで自分の恨みを晴らしてほしいと言い出した。[20] コウルリッジは一七九八年一一月一七日ごろにワーズワースに送った手紙で、『救世主』は最初の四編しか読んでいないと述べている。クロプシュトックはドイツのミルトンだと言われているが、会った感想では、まさにドイツだけのミルトンであって、決してイギリスのミルトンのような作家ではないと思ったようである。[21]

実際にコウルリッジは、クロプシュトックとミルトンの間には、大きな相違があるように考えていた。この考えは晩年も変わらなかったようで、一八三三年九月四日の『食卓談話』でも、ミルトンの『失楽園』とクロプシュトックの『救世主』とを比較すると、ミルトンの方が才能だけでなく、判断力の面でも技倆の面でも優れていることがわかると述べている。彼はこのとき六一歳に近かった。クロプシュトックは一七歳ごろからこの大作を計画し、

Hosei University Repository

長い年月をかけて完成したのであるが、ミルトンの失楽園ほどの傑作とは、コウルリッジには思えなかったのである。

クロプシュトック自身のミルトンに対する評価も、適切ではなかったようである。彼はミルトンの無韻詩よりもグラヴァーのものの方が優れていると言った。これにはコウルリッジもワーズワースも驚いた。コウルリッジには、クロプシュトックがイギリスの詩と詩人についてほとんど知らないように思われた。リチャード・グラヴァーは一七一二年生れのイギリスの詩人で、九巻本の叙事詩『レオニダス』の著者である。この本は一七三七年に出版され、翌三八年にはフランス語に、一七六六年にはドイツ語に翻訳されていたので、クロプシュトックは多分これを読んだものと思われる。この作品はこの当時は大分評判が良かったけれど、その後すっかり人々から忘れ去られてしまった。コウルリッジの渡独時には、彼はこの世になく、すでに一七八五年に没していた。

クロプシュトックは、前にも述べたように『救世主』を一七歳から計画しはじめたけれど、構想にたっぷり三年間かかったがその間一行も書けなかったと言った。[22] それほどこの作品には苦労をしたのである。最初は韻を踏んだ詩として三編書いたが満足できず、ギリシア語やラテン語の六脚韻を模倣したりしていろいろと苦労をし、三〇年ほどかかってしまったという。でも、実際の創作に要した年月は、二年以下であると言った。[23]

コウルリッジはクロプシュトックの『頌詩』を荘重な文体であると考えていた。彼はハンブルグで買って帰ったこの詩集をじっくりと読んだことと思われる。コウルリッジも詩に荘重さを求めたけれど、そこにはクロプシュトックの詩を念頭においていたのではないかと思われるふしがある。つまり、詩における荘重な方法に関してクロプシュトックを引き合いに出していることが、その何よりの証拠である。

クロプシュトックの『頌詩』が若いドイツの青年たちを捉えたように、若いときの詩人コウルリッジも、ボウルズの詩に感動し、ヤングの『夜の想い』に共感の想いを馳せた。クロプシュトックの詩は、確かに時代の先端を行くものであったが、コウルリッジの渡独時のドイツでは、すでにシュトルム・ウント・ドラングの時代は終り、世は古典主義的な方向へと流れていた。時代感覚に敏感な青年たちが、激情の詩より精神の安らぎの詩を求めることも当然であったろう。コウルリッジはこういう時代背景においてクロプシュトックと会ったのである。その意味で

Hosei University Repository

は、彼は過去の栄光に生きる詩人と話をしたのである。したがって、話がかみ合わないのも無理からぬところであろう。

クロプシュトックの作品は偉大であった。しかし激しく変動する時の流れの中で、その作品を見る人の評価の基準で、その評価が大きく変わることもあろう。コウルリッジがあるときはドイツにおけるクロプシュトックの業績を讃え、あるときはミルトンと比較して劣ると断じたことも、そうした基準のおき方によるものであろう。

七、むすび

クロプシュトックは、コウルリッジがドイツで初めて会った詩人であり、ドイツにおける過去の業績が素晴しかったので期待していたところ、会ってみると歩くのも痛々しい、同情をそそるような老人であった。かつらをかぶった彼を見て、コウルリッジは『救世主』の著者にそうしたかつらはふさわしくないと思った。コウルリッジは堂々とした詩人の姿を予想していただけに、まずその風貌から期待外れだった。さらに話をしてみると、イギリスの文学界のことはほとんどわからないばかりか、自国ドイツの文学的現状すらよく理解していないのに失望した。しかしこれらは、クロプシュトックが決して哲学者や美学者でもなく、また大学で教鞭を取る学者でもなく、単なる詩人であったことから生じている。しかも、ドイツで初めての詩人専科の人であった。したがって、文学における批評の眼や哲学的な思想に不慣れであったために、深い洞察ができなかったのである。このことは、コウルリッジと根本的に違うところであった。

さらにまた、コウルリッジが渡独したときは、ドイツの思想的な変化がもっとも激しい時代であった。したがって、現役を引退した老人には、とてもついて行けない速さで世の中が変わっていたのである。二五歳のコウルリッジと七四歳のクロプシュトックでは、それに対する対応の仕方がまるで違う。未来の可能性を求める青年と、過去の栄光に生きる老人では、考え方も、物事に取り組む態度も、まったく異なるのはあたりまえである。コウルリッジはそのことに気づいていないような気がする。

コウルリッジはクロプシュトックに会うことで、実は大きな収穫を得たのである。そのことに本人は気づいてい

Hosei University Repository

ないようであるが、イギリスの一青年詩人がドイツの古豪詩人よりも、彼には外国であるドイツの文学や哲学に関して遙かに深い洞察をもっていたという事実こそ、彼が優れた批評家の素質をもっていたことの証左となるであろう。コウルリッジは、クロプシュトックとの会合と対話から、そのことを今日のわれわれに示していることは明白な事実である。

このように考えてくると、クロプシュトックからの影響は、詩形や表現形式や詩人としての生き方の面で若干あるとしても、それよりむしろ、この両者の対比において、コウルリッジ自身が自信を得て、ドイツ文学を批評し、ドイツ哲学を受容する契機を作ったことの方が重要であるように思われる。コウルリッジは、クロプシュトックを批判しながら、実は、ドイツ文学の精髄にせまっていったのである。

注

(1) *CL*, I, 441. / *BL*, II, 169.
(2) *CL*, I, 443.
(3) *BL*, II, 169.
(4) *CL*, I, 443.
(5) *BL*, II, 171.
(6) *BL*, II, 170.
(7) *WL* (*E*), 525.
(8) *CL*, I, 441.
(9) *BL*, II, 179.
(10) *Loc. cit.*
(11) *Loc. cit.*
(12) *Loc. cit.*
(13) *BL*, II, 177.
(14) *Loc. cit.*
(15) *BL*, II, 158.

Hosei University Repository

(16) *CL*, I, 378.
(17) *BL*, II, 172 n.
(18) *BL*, II, 176
(19) *CN*, I, 340 & n.
(20) *BL*, II, 171.
(21) *CL*, I, 445.
(22) *BL*, II, 173.
(23) *CL*, II, 2346 & n.

コウルリッジの著作の略記号は、すべてプリンストン版全集の表記法に準拠する。